

# 韓国語韻律教育モデル策定に関する一考察

長谷川 由起子

## はじめに

日韓の間での人的往来が日常化し、メディアを通じて韓国語の音声に接する機会が増大するにともない、韓国語学習の目的が、相手の歴史や文化を「知る」ための手段から、言葉を通じた直接的コミュニケーションへとシフトしてきている。具体的な相手との直接的コミュニケーションにおいて音声言語の占める位置は大きく、これにより、韓国語の韻律的特徴に対する学習者の関心や要求が高まっている。

一方、韓国語ソウル方言（以下、「韓国語」）には示差的アクセントがないために、ごく最近まで、韓国語教育において韓国語の韻律的特徴は、平叙、疑問などの文法的意味をあらわす文末イントネーション以外、ほとんど触れられてこなかった。しかし、近年の研究によって韓国語の韻律的特徴と機能、そしてコミュニケーション上の重要性が明らかになるに従い、その多様な側面を教育に取り入れる試みが活発化しつつある<sup>1)</sup>。

しかしながら、韻律的実現には様々な要因が関わっており、未解明な点も多いため、体系的な韻律教育モデルを確立するには、まだまだ課題が多い。本稿は、韓国語において発話に音調が付加される単位である音調句（詳細は2.1）の形成について、教育モデル策定の立場から、その問題の所在を明らかにしたのち、特に日本語とは異なった韻律的振る舞いが観察される韓国語の単音節語について、学習者の問題音調の起こる原因と対処の糸口を見出そうとするものである。

## 2. 先行研究

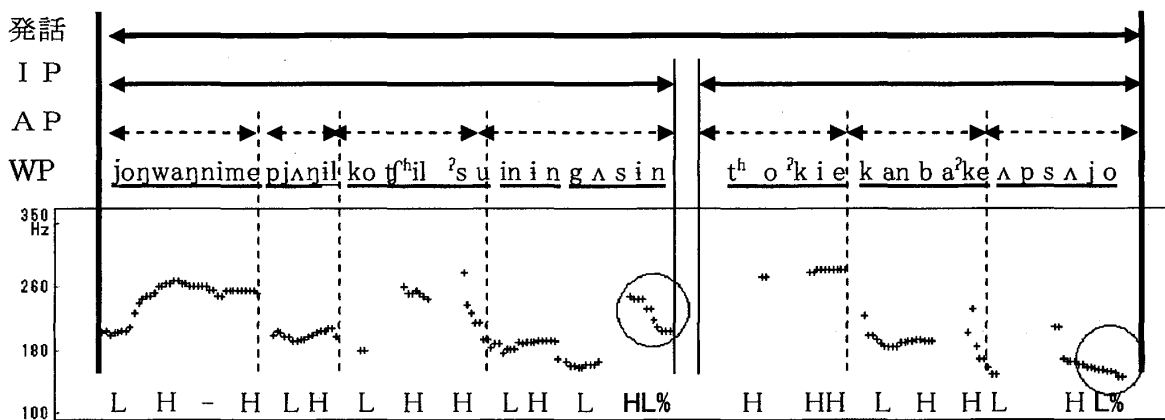
### 2.1 韓国語の韻律的特徴

韓国語の韻律的特徴については、これまでのところJun S. A. (1993, 2000) の韻律モデルが最も明快な記述とされている。その基本的枠組みは以下の通りである。

- (1) ① 韓国語ソウル方言はIntonational Phrase (IP) とAccental Phrase (AP) を韻律単位とし、発話 (utterance)  $\geq$  IP  $\geq$  AP  $\geq$  韻律語 (prosodic word) <sup>2)</sup> の階層構造をなす<sup>3)</sup>。
- ② IPは境界音調 (boundary tone, %で表示) と句末音節の長音化およびオプションで付加される休止 (pause) によって特徴付けられ、APは一定の音調パターンで特徴付けられる。
- ③ APの基本音調パターンはTHLH (低調=L, 高調=H, APの頭子音が濃音 (tense)・激音 (aspirated)・/s/・/h/である場合はT=H, その他の場合はT=L) となる。
- ④ 基本音調THLHのTHは第一・第二音節に, LHはAPの次末・末音節に付加され<sup>4)</sup>, 3音節以下の場合には間のH・Lのいずれか, もしくは両方が未実現 (undershoot) となる。
- ⑤ APがIP末に位置する場合, 句末音調は上位層であるIP境界音調として実現する。

例として, 図1に国立国語研究院 (2003) より, 20代女性のソウル方言話者の「용왕님의 병을 고칠 수 있는 것은 토끼의 간밖에 없어요 (竜王様の病気を治すことができるのは兎の肝しかありません)」という発話を音声分析ソフトSUGI SpeechAnalyzerにかけて音の高低の動きを表すF0 (基本周波数) 曲線を抽出し, Junモデルの韻律単位および音調を記した。

<図1> 韓国語の韻律構造



この発話は二つのIPからなり, 両IP末にはそれぞれ境界音調HL%, L%が現

れ、最初の I P 境界の直後には休止が現れている。両 I P はそれぞれ 4 つと 3 つの A P からなり、頭子音が激音である「투끼의」が HHH を、文末の「없어요」が LML を示しているのを除けばすべて L (HL) H の音調を示している。

本稿は基本的にこの Jun S. A. (1993, 2000) の枠組みに従って議論を進めていくが、ここで用いられている A P (Accentual Phrase) に当たる単位<sup>5)</sup>を、本稿では「音調句」と呼ぶことにする。韓国語の韻律研究において、「アクセント」という用語は既に 2 つの意味、すなわち、①方言における示差的な高低アクセント<sup>6)</sup>と、②発話のリズム単位 (말토막, rhythmic unit) の中で聞こえの際立ち (돋들림, prominene) があるとされる音節に置かれる強勢 (stress) の意味で使用されている<sup>7)</sup>からである。本稿ではこのような高低アクセントや強勢とは関係なく、音調的にひとつのまとまりを示す最小の単位という意味で「音調句」という用語を使用する。なお、I P (Intonational Phrase) に当たる単位は「イントネーション句」とする。

## 2.2 音調句形成要因

韻律音韻論の中でも Intonational Approach の立場から提案された Jun S. A. (1993) のモデルは、F0 曲線として現れる音声的実現を出発点としてその構造を記述したものであり、与えられた音連続に対し、その意味や文法構造から表層の音声的実現を積極的に指定するものではない。Jun S. A. (1993) によると、すべての文の構成要素が新情報であればすべての韻律語が独立した音調句を形成するが、一般に音調句の形成は、統語構造、フォーカス、情報の新旧、句の長さ、発話速度、意味的要因 (実質的な意味を持つかどうか、意味的に近く予測可能な語連続かどうか) 等に左右されるとし、句形成の予測困難さが強調されている<sup>8)</sup>。Lee H. Y. (1997) は、リズム単位境界の位置選択 (ここでの音調句形成にあたる) には、①統語構造、②文の長さ、③フォーカス、④文の韻律構造 (統語的句の長さ・重さ)、⑤話速とスピーチスタイルの順で要因が適用されるとした。

これら音調句形成要因と関わる先行研究として、統語構造については Kwon J. I. et al. (1997), Min G. J. (2004), 宇都木 (2004b), フォーカスについては Jun S. A. (1998), Min G. J. (2004), 宇都木 (2004a), 話速と句長については Jun S. A. (2003), スピーチスタイルについて Pak J. H. (2003) などがある。このうち Min G. J. (2004) は日韓両言語の比較研究である。

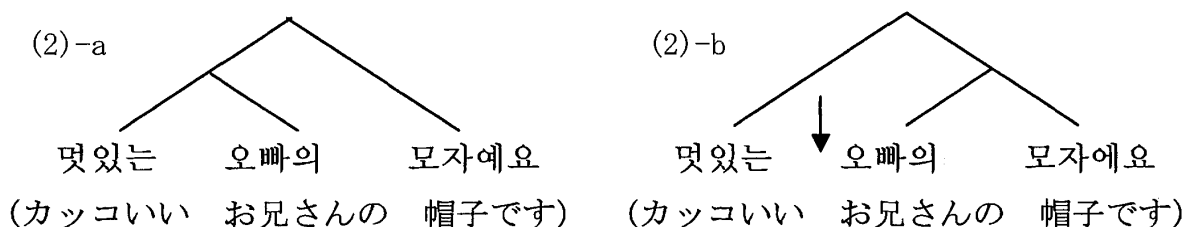
これらの研究を総合すると、統語構造およびフォーカスについては日韓両言語で共通の性質が認められると言える。

まず、統語構造と音調的実現の関係の検証にしばしば用いられるのが統語的曖昧文であるが、統語的曖昧文として、韓国語では次のようなものが挙げられる。

(2) 멋있는 오빠의 모자예요. (カッコいいお兄さんの帽子です)

(3) 아파서 오지 않았어요. (痛くて来ませんでした／痛くて来たのではありません)

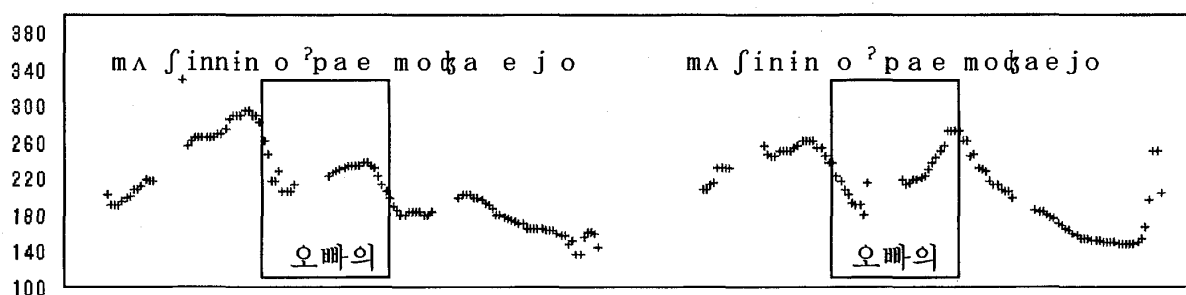
(2)は「멋있는 (カッコいい)」が「오빠 (お兄さん)」を修飾するか、「오빠의 모자 (お兄さんの帽子)」を修飾するか、すなわち統語構造上、右枝分かれか左枝分かれかという二通りの解釈が可能となる。



このような統語的曖昧文は、(2)-aの左枝分かれ構造の場合、三つの句のF0ピークが漸次的な下降を見せるのに対し、(2)-bの場合、右枝分かれによって統語的に距離の生じる部分、すなわち矢印部分から明瞭に音調的立ち上がり (F0ピークの上昇) を見せると同時に後続要素の音調的立ち上がりが抑制 (F0ピークの抑制) されて先行要素に融合もしくは従属することにより、曖昧性が解消される<sup>9)</sup>。

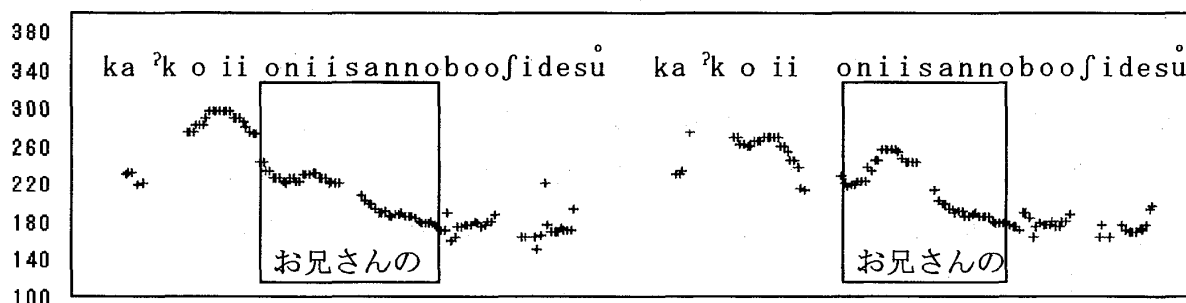
図2、図3に見るように、(2)-aの場合、「오빠의」「お兄さんの」を挟んで先行要素から後続要素に向かって漸次的な下降を見せているが、(2)-bの場合、「오빠의」「お兄さんの」が先行要素に勝るか匹敵する音調的立ち上がりで後続要素の音調的融合もしくは従属が伺え、韓国語、日本語に類似の現象だと言える。

<図2> 「멋있는 오빠의 모자예요」 左が(2)-a, 右が(2)-b



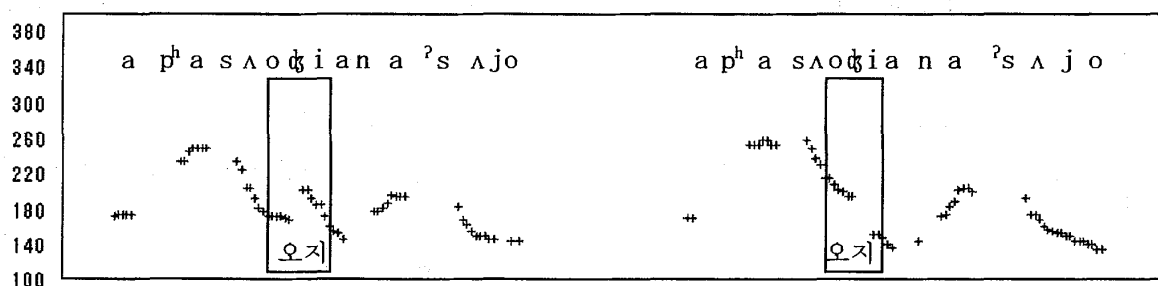
<図3> 「カッコいいお兄さんの帽子です」 左が(2)-a, 右が(2)-b

※[u]のように小さなOを冠した母音は、無声化していることを表す。以下も同様。

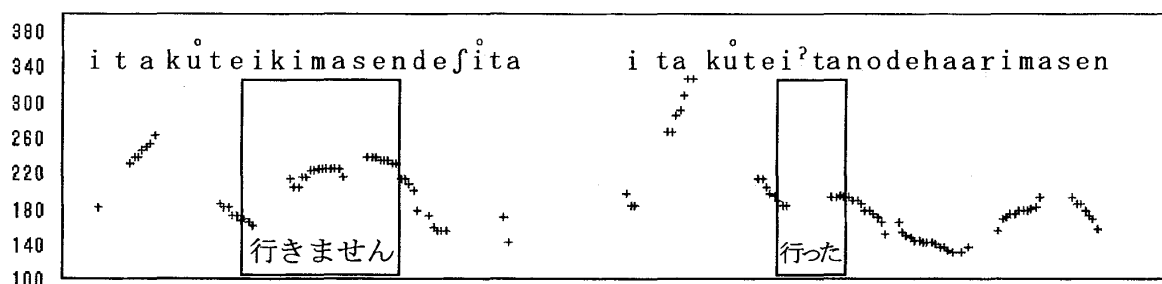


(3)は、「-지 않았어요 (-しませんでした, -したではありません)」という否定の及ぶ範囲(scope)が「오다」「行く<sup>10)</sup>」であるか, 「아파서 오다」「痛くて行く」であるかによって二通りの意味に解釈できるというものである<sup>11)</sup>。該当する日本語文は形態的に異なるため, 日本語ではこの種の曖昧文は問題にならないが, 音調的には類似の特徴を示す<sup>12)</sup>。図4, 図5に見るように, 否定が「오다」「行く」のみに及ぶ場合は「오지」「行き」が音調的に立ち上がるのに対し, 否定が「아파서 오다」「痛くて行く」に及んでいる場合は, 「오지」「行った」が音調的に明瞭に立ち上がらず先行要素「아파서」「痛くて」に融合または従属している。

<図4> 「아파서 오지 않았어요」 左が(2)-a, 右が(2)-b



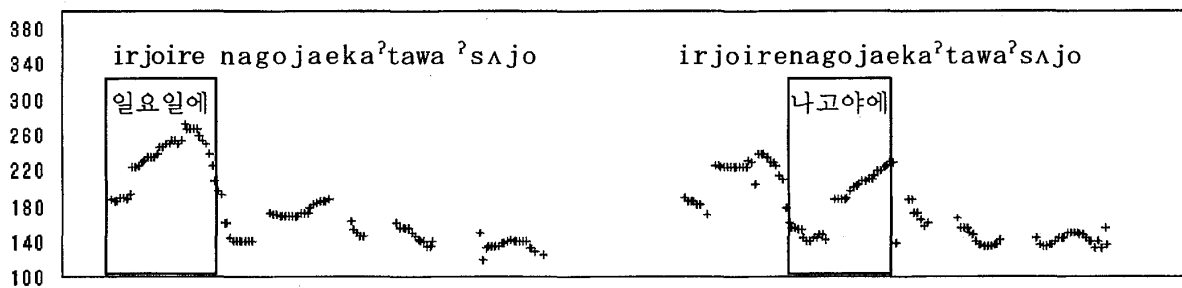
<図5> 「痛くて行きませんでした」(左)と「痛くて行ったではありません」(右)



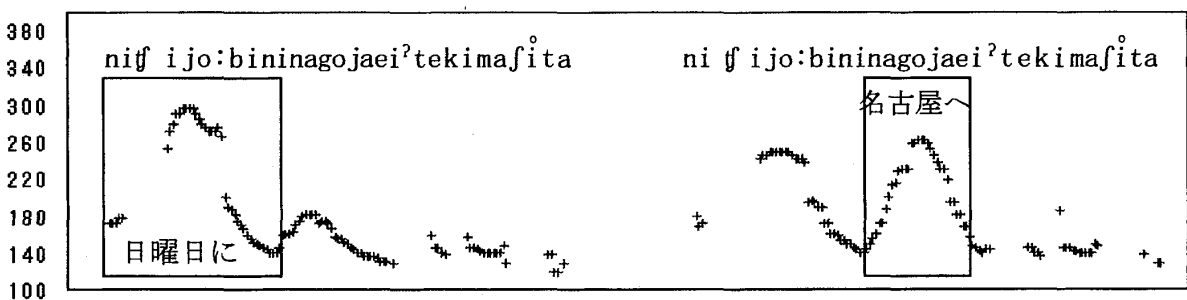
次にフォーカスに関する先行研究を総合する。「일요일에 나고야에 갔다왔어요 (日曜日に名古屋へ行って来ました)」という文は、「언제 나고야에 갔다왔어요? (いつ名古屋へ行って来ましたか)」という問いに対する答えである場合と、「일요일에 어디 갔다왔어요? (日曜日にどこへ行って来ましたか)」という問いに対する答えである場合とで異なった語にフォーカスが置かれる。前者なら「일요일에 (日曜日に)」にフォーカスが置かれ、後者なら「나고야에 (名古屋へ)」にフォーカスが置かれる。

フォーカスの置かれた句はF0ピークが上昇して音調的に大きく立ち上がり、同時に後続要素のF0ピークが抑制されることでフォーカスの意図が実現される。図6・図7からわかるように、この点も日韓両言語に共通のメカニズムである<sup>13)</sup>。

<図6> 「일요일에 나고야에 갔다왔어요」(左) と 「일요일에 나고야에 갔다왔어요」(右)



<図7> 「日曜日に名古屋へ行って来ました」(左) 「日曜日に名古屋へ行って来ました」(右)

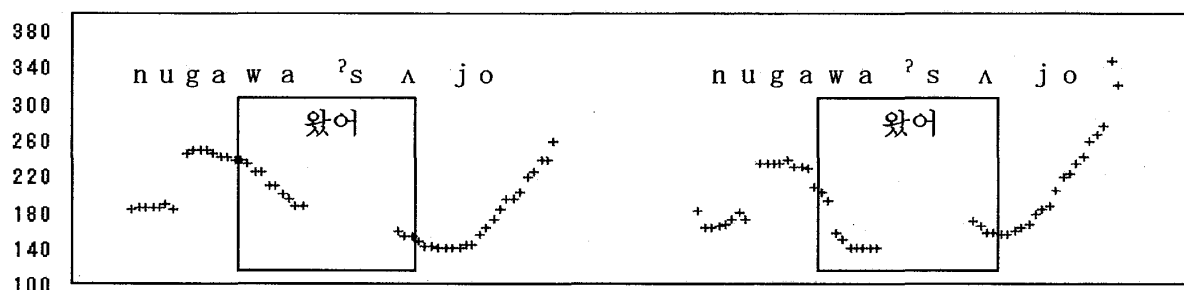


さらに、韓国語には疑問詞の多義性による曖昧文が存在する。

- (4) 누가 왔어요? (誰が来ましたか/誰か来ましたか)

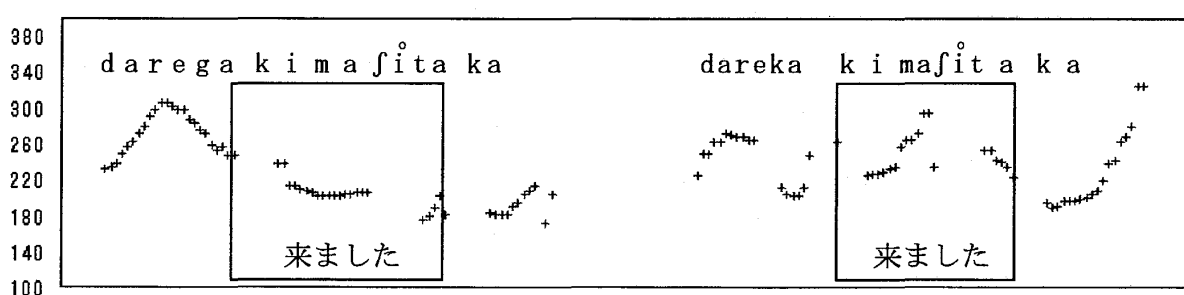
(4)は同一形態「누가 (誰が, 誰かが)」が疑問と不定の両義を持つことによる曖昧文であるが、「왔어요」が先行要素に音調的に従属するか, 新たな音調の立ち上げがあるかによって曖昧性が区別されるとされる<sup>14)</sup>。これは, 言い換えると, フォーカスが「누가」にあるか「왔어요」にあるかによる違いだと言うことが出来る。すなわち, フォーカスを受けた部分のF0ピーク上昇と後続要素のF0ピーク抑制が生じるため, 「누가」にフォーカスがあるwh疑問文では「왔어요」が先行要素に音調的に融合し, 「왔어요」にフォーカスのあるyes-no疑問文では「왔어요」で新たな音調句が立ち上がるのである。

<図8> 「누가 왔어요?」(左) と 「누가 왔어요?」(右)



日本語では, これらに該当する日本語文が形態的に異なるため, この種の曖昧文は存在しないが, やはりフォーカスを受けた部分の直前に句境界が生じ, 当該句にF0ピーク上昇と後続要素のF0ピーク抑制が起こるため, 日本語でも図9に見るように, 「誰が」にフォーカスのあるwh疑問文では「来ましたか」が先行要素に音調的に融合し, 「来ましたか」にフォーカスのあるyes-no疑問文では「来ましたか」で音調句の新たな立ち上げが現れる。

<図9> 「誰が来ましたか」(左) と 「誰か来ましたか」(右)



以上で見ると, 統語構造やフォーカスの音調的実現は, F0ピークの上昇およ

び抑制という点で、日韓両言語の間で共通の特徴を持っているといえる<sup>15)</sup>。従って、お互いの言語を目標語として学ぶ両言語の母語話者は、このような韻律的特徴とその機能を学ぶに際し、さして大きな困難はないものと思われる。ただ、統語構造やフォーカスによる違いを認識し、それを音調的に実現させること自体は、学習がそれなりに進んだ学習者でなければ困難であろうことが予想され、句形成に共通の特徴が見出せるといっても、2.3で述べるように音調付加のしくみそのものに違いがあることから、やはり段階を追った体系的な韻律教育は欠かせないと言えよう。

さらに、韓国語の音調句形成にはスピーチスタイル、話速、音節数などの要因が働くと考えられる。

発話速度と音節数の関係についてはJun S. A. (2003a) が、普通の話速ではA Pに含まれる音節数は5音節以下だが、速い話速では7音節まで含まれうるとし、単音節語のA P形成については意味要因（意味の親疎、実質名詞かどうか）が強く働いていることを指摘している。

Pak J. H. (2002) は、スピーチスタイルが音調句形成に影響を及ぼすとした。同一文の対話体と朗読体における韻律的実現を観察した結果、①音調句は対話体より朗読体でより多く形成される、②朗読体の音調句は2～3音節が70%を占め、対話体では1～8音節まで様々に実現される、③朗読体の音調句の音調パターンはL L H, L H L Hが大半を占めるが、対話体ではこれにL H Hが加わるとの興味深い報告をしている。

これらの要因については未だ日本語との比較は行われていないが、音節数要因、中でも単音節語の音調句形成は、日本語とは異なる様相を見せることが予想される。本稿はこの点に注目するものである。

### 2.3 教育的応用

韓国語の韻律的特徴を分節音の知覚および創出に生かそうという試みが、Jeong M. S. & Lee G. H. (2000), Hasegawa (2005) である。語頭の激音と平音は音韻論的には氣息性の有無によって特徴付けられるが、知覚においては氣息の長さ（VOT値）よりむしろ声の高さ（F0値）が重要な意味を持つことが、Lee K. H. & Jeong M. S. (2000), Kim M. R. et al. (2002), Kim M. D. (2004)<sup>16)</sup>により報告されており、これを韓国語教育に応用したものである。

Jeong M. S. & Lee G. H. (2000) は、平音・激音・濃音という三項対立のある閉鎖音を日本語を母語とする学習者に指導する際、語頭に平音が来る語を日本語の無アクセ

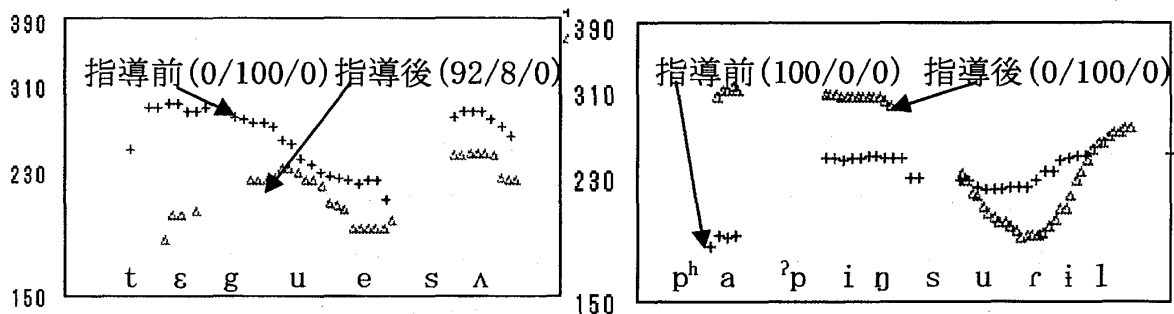


ント語に、語頭に激音・濃音が来る語をを頭高アクセント語に引き当てて説明する指導法を提案した。学習者の母語の特性を利用し、教育効果を上げようという試みは評価に値するが、語の文中発話ではなく単独発話を指導の対象としていること、韓国語の子音知覚と音調の関係と日本語のアクセント体系とは性質が異なることなどから、指導の効果は一時的・部分的な効果に止まるのではないかと考えられる<sup>17)</sup>。

Hasegawa (2005) は、句頭音と句頭音調 (Jun1993におけるTH<sub>1</sub>) の関係を学習者に明示することにより、句音調の自然さおよび句頭子音認識率が改善されることを示した。すなわち、学習者に対し、韓国語では語頭音によって句音調のパターンが決まること、単独発話と文中発話では語の音調が異なること等を説明して発音練習を行った後、指導を行う前と後に録取した学習者発話に対する韓国語母語話者 (以下、「母語話者」) による知覚実験を行い、句音調の矯正とともに句頭子音の認識率が飛躍的に向上することを確認した。図2はその典型的な例である。指導前と指導後で変わったのは音調のみであったが、これにより子音の認識率が劇的に向上していることがわかる。

<図10> 学習者に対する句音調指導前と指導後のピッチ曲線と句頭子音認識

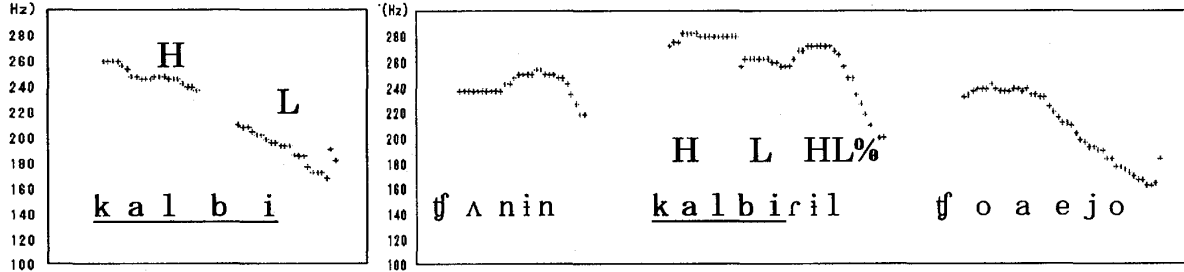
※ 図のF0曲線は下線部のみを示す。カッコ内の数字は母語話者による句頭子音の平音/激音/濃音の認識率 (%)



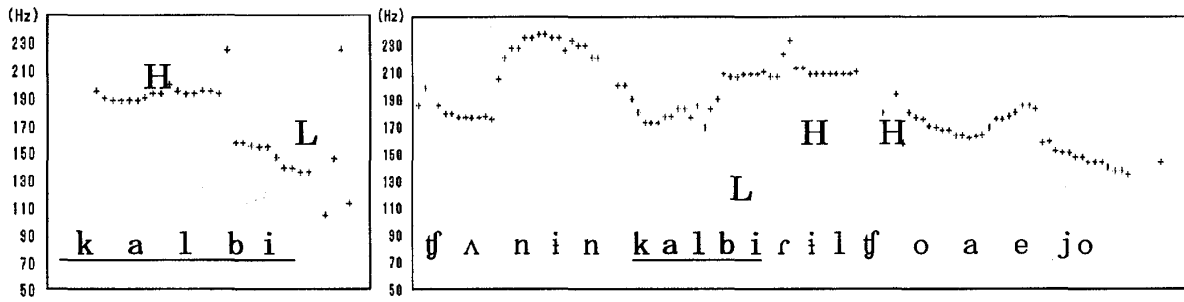
録取された指導前の学習者発話には韓国語の音調パターンに反する音調実現が多数見られたわけだが、学習者がこのような問題音調を実現しやすい原因については、長谷川 (2000) で既に考察している。すなわち、日本語の外来語では一般に「ピザ/HL/」「コーラ/HLL/」「オレンジ/LHLL/」「アラカルト/LHHLL/」「エスカレーター/LHHLLL/」のように、起伏型アクセント、もしくは「語末から3モーラ目を含む音節にアクセント核」が置かれる<sup>18)</sup>ため、韓国語も「テグ/HL/」「カルビ/HLL/」「ビビンバ/LHLL/」「テコンドー/LHLL/」「パッピンス/LHHLL/」「サンギョプサル/LHHLL, HHHLL<sup>19)</sup>/」のように、外来語アクセントが適用された形で受け入れられてしまう。しかも、日本語では語アクセントが文中で維持されるため、この母語の特徴が転移し、

その音調を図3のように文中でもそのまま実現してしまうのである<sup>20)</sup>。

<図11> 音調指導前の学習者による「갈비」(左)と「저는 갈비를 좋아해요」(右)



<図12> 母語話者による「갈비」(左)と「저는 갈비를 좋아해요」(右)



また、韓国語において単独で発音された語は平叙文末音調である下降調で実現される傾向にあるため<sup>21)</sup>、図4「갈비」に見るように、2音節語(日本語のモーラ感覚によると2~4モーラ)がHL(モーラ感覚でHL, HLL, HLLL)で実現される傾向にあることにより、このような音調がさらに強化されて内在化する可能性も考えられる。

이현의 (2005) は、韓国語のフォーカス発話における韻律の持つ機能を日本語を母語とする学習者がどの程度理解し実現できるか、聴取および発話実験を通じて調査した。その結果、学習者はフォーカスの置かれた句の音調句の立ち上がり(F0上昇)と後続要素の音調的融合(dephrasing)の機能を十分理解しておらず、発話においてもこれらを十分に実現できないことが分かった。その原因について、後続要素のdephrasingの欠如は音調句形成に関する教育の不在によるとし、フォーカスの置かれた句のF0上昇が不十分であることを日本語のF0上昇幅の狭さ、つまり母語の発音習慣からの転移に求めている。

しかし、宇都木(2004a)が韓国語を母語とする日本語学習者の日本語発話を対象にフォーカス発話における韻律的实现について調べた際、dephrasingすべきところでのその未実現を指摘している。すなわち韻律的实现のしくみには日韓両言語に共通の特

徴が認められるにもかかわらず、日本語を母語とする韓国語学習者および韓国語を母語とする日本語学習者に、その未習得が観察されるのである。このことから韻律的特徴未習得の原因は、母語の転移というより韻律的特徴習得自体の困難さ、および適切な韻律教育の不在を示すものではないかと思われる。

以上のように、韓国語教育において韓国語の句音調を学ばせることが伝達機能向上の上でも非常に重要であることは明白であり、またその有効な指導方法も開発されつつある。しかし、これを部分的な指導にとどまらない体系的な韻律指導モデルへと発展させていくためには、音調句形成をある程度明示する必要がある。そこで音調句形成要因が問題となってくる。特に日本語とは大きく異なった様相を見せることが予想される単音節語の韻律的振る舞いに注目し、以下で、この点を抜きにしては体系的な韻律教育モデルの策定は困難であることを示す。

### 3. 単音節語の音調的振る舞い

韓国語には単音節語が多いことが知られているが、その多くが学習の早い段階から登場する。「저」「내」「뭐」等の代名詞、「이」「그」「새」等の連体詞、「잘」「좀」「더」「왜」等の副詞、「앞」「위」「귀」「입」「약」「병」「물」「밥」「집」「방」「돈」「역」等の名詞、すべての漢語数詞、固有語数詞の一部およびその連体形、「것」「개」「명」等、単位名詞を含む形式名詞のほか、語幹が単音節で開音節である用言の連用形および連体形も単音節である等、使用頻度の高い基礎的な語彙が多い<sup>22)</sup>。すなわち学習者は早い段階から頻繁に単音節語に接することになる。

したがって、学習者にとってはこれらの単音節語の韻律的振る舞いに関する何らかの情報が必要となるが、これらすべての単音節語があらゆる文脈や環境で同様の音調句を形成するわけではない<sup>23)</sup>。試みに国立国語研究院(2003)<sup>24)</sup>の音声資料の中の約10,000字分の文<sup>25)</sup>の朗読音声(20代の男女各5名計10名)に現れた単音節語<sup>26)</sup>のうち、当該単音節語および後続要素の頭子音が激音・濃音・/s/・/h/で、音調句を成したか成さないかの判断が不可能である場合と単音節語がイントネーション句末に位置した場合、そして補助用言を除いた91語(異なり語数39語)を対象に、単音節語の韻律的振る舞いを観察した。観察は主に聴取で行い、聴取による判定が困難なものは音声分析ソフトSUGI SpeechAnalyzerに現われたピッチ曲線により行った。観察結果は以下の通りである。

- ① 朗読者全員一致で単音節語を後続要素と一つの音調句と成したもの
- 否定の副詞「안」: 「안 오시는 걸까?」他 4例
  - 慣用句および慣用的な表現: 「잘 가」「웬 일이죠?」「왜 그래요?」  
「(땀이) 비 오듯」「밥 먹는 모습」「먼 곳까지」「못 본 척」
  - 連体詞+一音節名詞: 「내 옷」
- ② 大部分の朗読者が単音節語を後続要素と一つの音調句と成したもの
- 不可能の副詞「못」: 「못 보았소?」(9人) 「못 견디고」(8人)
  - 連体詞: 「그 말을」「새 밥으로」(8人)
- ③ 全員または大部分の朗読者が先行要素と単音節語を一つの音調句と成したもの
- 位置名詞: 「마을 앞」
  - 動詞の連体形: 「이를 본 호랑이는」(全員) 「등에 진 가방은」(9人)
- ④ 朗読者全員が単音節語を単独で一つの音調句と成したもの
- 連体詞: 「그 이유를」「내 가슴 속에」「이 동아줄을」  
「그 꽃감이란 놈」「내 날개옷 (을)」「그 연못에」「이 나무꾼은」  
「이 아름다운 용궁」「이 바보야!」「그 아래에서는」
  - 副詞: 「참 이상하다」「또 엄마의 목소리가」「똥 그쳤습니다」  
「더 무서운 짐승」「셋 낱을 때까지」「꼭 지키셔야」
  - 非修飾語との間に距離がある副詞 「왜 엄마가 안 오시는 걸까?」
  - 用言の連体形: 「큰 구렁이가」「큰 목소리로」
- ⑤ 大部分の朗読者が単音節語を単独で一つの音調句と成したもの
- 連体詞: 「두 아이는」「네 간을」(9人)  
「온 동네」「네 간으로」(8人)
  - 副詞: 「잘 먹지만」「장검다리는 다 건너」「나보다 더 무서운」  
「왜 그렇게 귀가 길어요?」(8人)
  - 名詞: 「돌 아래」
- ⑥ 単音節語の音調句実現が一定でなかったもの
- 連体詞: 「내 고향」「내 앞에」「내 등에 타」「이 무렵」「저 아이」  
「이 마을」「이 날도」「이 옷이라도」「세 아이를」「저 밖」
  - 副詞: 「딱 나온 신문」「왜 이렇게 울고 있을까?」  
「시간이 다 되었구나」「왜 그렇게 맛있는지」「딱 지은 밥을」  
「잘 먹어서」「병을 잘 고치기로」「노점들이 더 많아져서」  
「집에서 줄 먼 곳까지」
  - 名詞: 「문 열어라」「설 고향 남해는」「따끈따끈한 밥 들어가는 게」

- d. 用言連体形 : 「엄마가 준 꽃감을」 「집에 갈 차비도」  
 「신문을 산 일밖에」  
 e. 用言連用形 : 「밥을 피 주셨는지」 「제가 피 드릴게요」

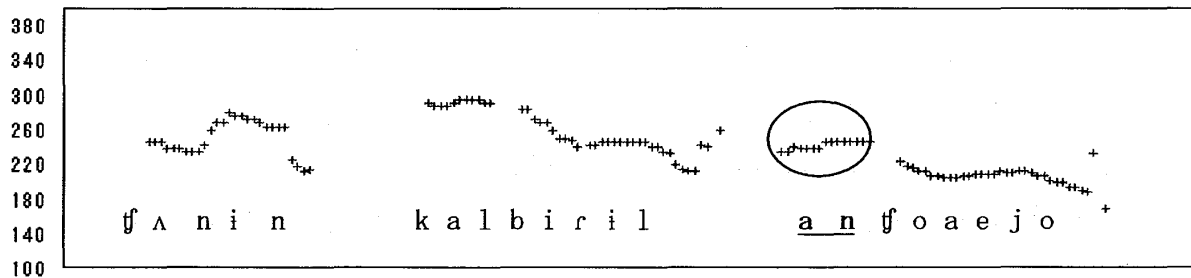
⑤b, ⑥bのうち波下線を引いたものは、一部、先行要素と音調的に融合していると思われる場合があった。

以上から伺えることは、先行要素または後続要素とともに音調句を形成しやすいかどうかは、品詞とはほとんど関係がないこと、当該単音節語と音調的に融合した先行・後続要素との意味的な親疎とも強い相関関係はなさそうだということ、慣用的な語連続は音調句統合の傾向が強いということが言えそうである。上記資料は朗読体であるため、音調句形成において自律発話とは異なった傾向を示す可能性も考えられるが、Pak J.H. (2002) で「音調句は対話体より朗読体でより多く形成される」としていることから、少なくとも朗読体において大部分の話者がひとつの音調句で実現した語連続については、韓国語教育においてもひとつの音調句を成すように指導する必要性が高いと言いうことができよう。

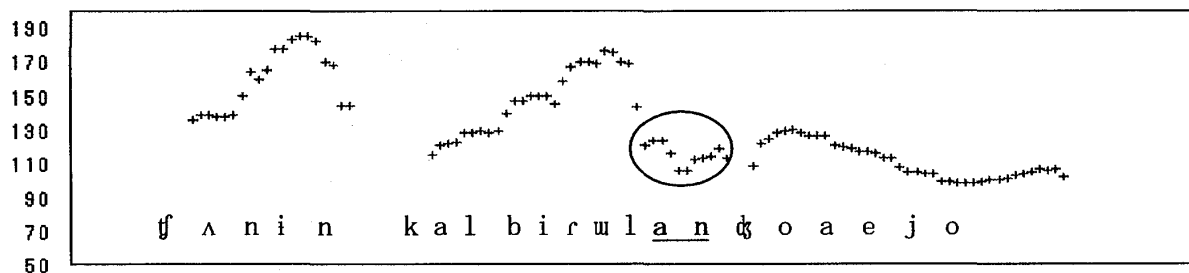
#### 4. 学習者の発話における単音節語の音調的振る舞い

以上の考察に基づき学習者の韓国語発話<sup>27)</sup>を観察すると、図13、図15のような問題音調がしばしば表れることを指摘することができる。母語話者発話である図14、図16と比較してみよう。

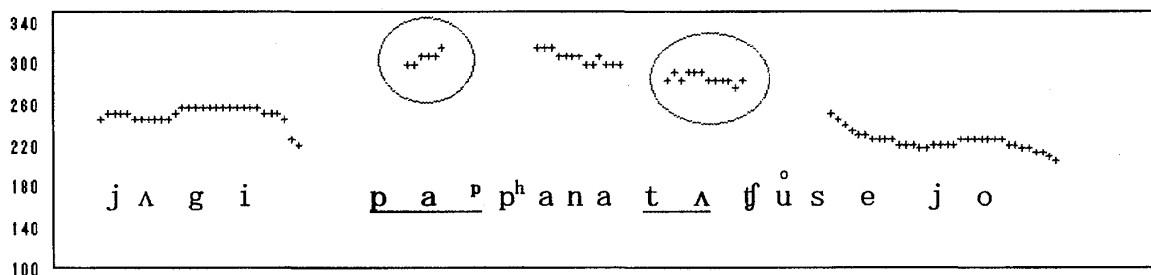
<図13> 学習者による「저는 갈비를 안 좋아해요.」



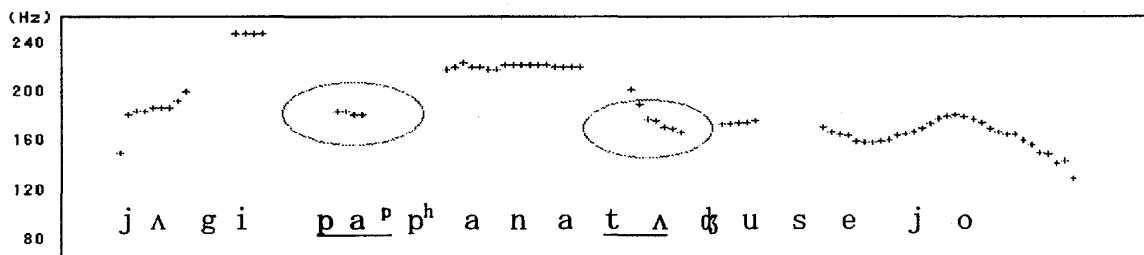
<図14> 母語話者による「저는 갈비를 안 좋아해요.」



<図15> 学習者による「여기 밥 하나 더 주세요.」



<図16> 母語話者による「여기 밥 하나 더 주세요.」

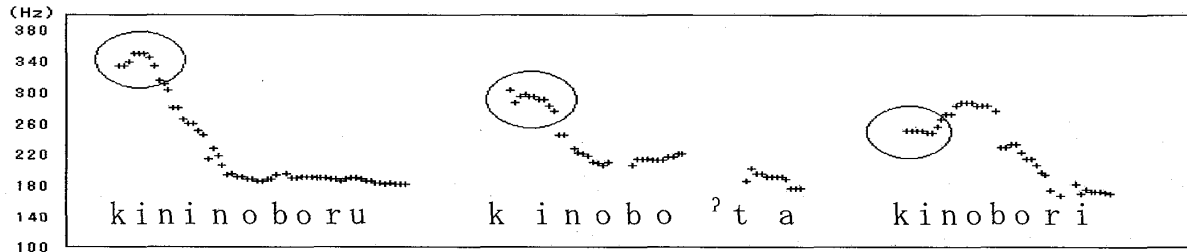


母語話者による発話では、図16の「주세요」の頭子音が有声音化しており<sup>28)</sup>、「안」「더」といった単音節語にL音調が付加されて後続要素と融合し、ひとつの音調句をなしている。これに対し、学習者発話においては、後続句頭子音は有声音化していない<sup>29)</sup>、音調的に低くあるべきものが高くなっており、音調句として融合していない。図16から「밥」と「하나」がひとつの音調句を成しているかどうかは不明だが、「밥」が仮に単独の音調句だったとしても図15のような高い音調が付加されると、頭子音は激音と誤認されるであろう。

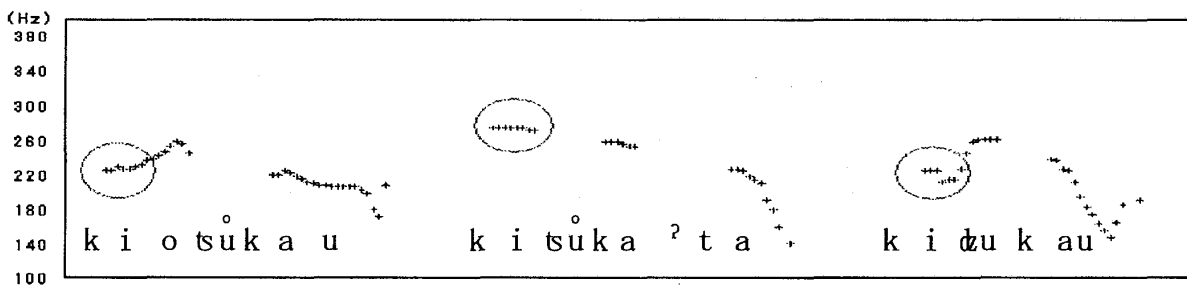
このような問題の原因は以下のように考えられる。日本語の場合、単音節語に助詞などが付かず単独で句をなすこと自体がくだけた話し言葉に限られた、やや特殊なケースだが、その場合にも単音節語が後続要素と融合することは決してない。例えば図17・図18左側の「木に登る」「気を使う」から助詞が落ちて同図真ん中の「木、登る」

「気, 使う」となった場合, 各単音節語と後続句の間には融合が感じられない。これは, いくら速く, くだけた調子で発話するなどしても変わらない。また, 「木」「気」はそれぞれ起伏型と平板型のアクセントであるが, 単独発話の場合は両者ともH音調で実現している。

<図17> 日本語母語話者による「木に登る」「木, 登った」「木登り」

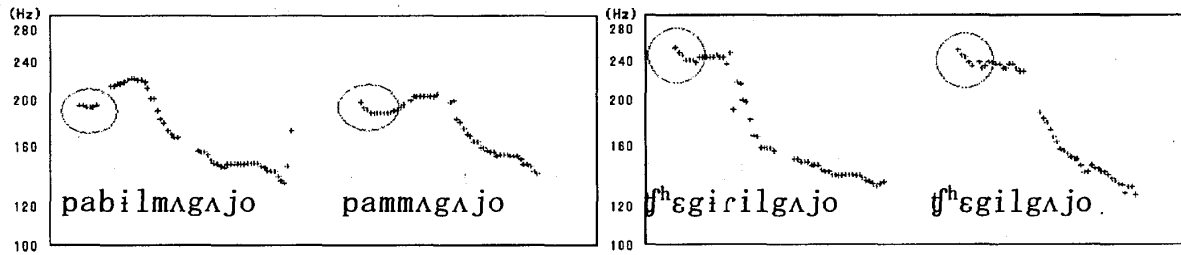


<図18> 日本語母語話者による「気を使う」「気, 使った」「気遣う」



一方, 図19に見るように, 韓国語で音調句が一つで実現された図19右の「밥 먹어요」の音調は日本語の「木登り」「気遣う」のような複合語の音調 (図17・図18の右端) と類似のパターンを見せている。つまり, 学習者は韓国語の単音節語と後続要素とを (日本語の) 複合語のような音調で発話すべきところを, 日本語と同様の音調, つまり「木, 登った」「気, 使った」 (図17・図18の真ん中) のような音調で実現したために問題音調となったのである<sup>30)</sup>。

<図19> 韓国語母語話者による「밥을 먹어요」「밥 먹어요」「책을 읽어요」「책 읽어요」



学習者が仮に句音調の基本パターンを十分に習得することができたとしても、音調句形成の要因についての知識がなければ、韓国語発話の適切な韻律的実現は困難である。中でも単音節語の音調句形成は、日本語のそれとは非常に異なった様相を呈しているうえ、音調句形成自体が流動的であることから、特別の配慮が必要だと言えよう。

以上で観察した対象は朗読体もしくは擬似話し言葉であるが、韓国語の音調句形成要因としてスピーチスタイル、速さなどの要因も働くと考えられており、これらを話し言葉を対象とした教育モデルの直接的な基準とすることは難しい。朗読も学習者にとって軽視できない活動であるので、朗読体の韻律的特徴を抑えつつも、話し言葉における音調句形成、特に単音節語の音調的振る舞いについて詳しく調査していく必要がある。

## 5. まとめ

本稿は、日本語を母語とする学習者にとって習得に大きな困難が予想される韓国語の韻律的特徴について考察し、教育モデル策定のために何が課題であるかを指摘した。

日本語との文法構造上の類似から、統語的・談話的要因による韻律句形成にさほど大きな困難はないであろうと予想されるにも関わらず、自然習得を期待するのは難しい何より、アクセント言語である日本語の韻律体系が局所的な音調指定に混乱を招かせているうえ、分節音の認識にも影響を及ぼすことが明らかである以上、体系的で明示的な指導が必要である。しかし、韻律教育モデルを確立させるためには、韓国語の音調句形成要因をよく整理し、特に日本語母語話者にとって母語の転移が予想される単音節語の韻律的振る舞いについて、朗読体・会話体に分けて詳細な調査を行い、その実態を解明していく必要があることを指摘した。

また、本稿で用いた学習者発話は韓国留学生のものであったが、日本国内の韓国語



学習者を対象とした場合, 課題はさらに多様かつ複雑であることが予想される。また, 韻律教育の教育要目としては今回扱った音調句形成とその音調のみならず, 当然のことながら文イントネーションについても考察されなければならない。これらのことも含め, 今後の課題としたい。

## 参 考 文 献

### <日本語文献>

- 井上史雄, 1992, 「イントネーションの社会性」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』, 三省堂, pp. 143-168
- 宇都木昭, 2004a, 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」『音声研究』第8巻第1号, 日本音声学会, pp. 96-108
- 宇都木昭, 2004b, 「朝鮮語ソウル方言における統語的曖昧文とF0の下降現象」『言語情報学研究報告』21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科, pp. 291-299
- 宇都木昭, 2004c, 「朝鮮語ソウル方言における引用形のピッチパターン」『朝鮮語研究2』朝鮮語研究会, くろしお出版, pp. 7-45
- 窪園晴夫, 1998, 「音韻構造の普遍性と個別性」『日英語比較選書⑩音韻構造とアクセント』中右實編, 研究社出版
- 郡史郎, 1997, 「日本語のイントネーション型と機能」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, pp. 169-202
- 郡史郎, 2003, 「イントネーション」『朝倉日本語講座③音声・音韻』上野善道編, 朝倉書店, pp. 109-131
- 長渡陽一, 2005, 「抑揚で差がつく! ソウルマル」『韓国語ジャーナル』12号, アルク, pp. 22-27
- 長谷川由起子, 2000, 「日本語を母語とする韓国語学習者の抑揚について」『九州産業大学国際文化学部紀要』第16号, 九州産業大学国際文化学会, pp. 9-38
- 長谷川由起子, 2005, 高校生のための韓国朝鮮語 I 教師用指導書, 白帝社
- 服部四郎, 1968, 「朝鮮語のアクセント・モーラ・音節」, 『ことばの宇宙』, テック言語教育事業グループ, <『服部四郎論文集』3 (三省堂, 1989) に採録>
- 福井玲, 2000, 「韓国語諸方言のアクセント体系について」, 『韓国語アクセント論叢』, 東京大学人文科学系研究科東洋言語研究室
- 関光準, 1989, 「韓国語アクセントの音響的特徴について—大邱方言における一音節名詞の基本周波数曲線と持続時間—」, 『朝鮮語教育研究』3, pp. 71-89, 近畿大学教育研究所

### <韓国語文献>

- 国立国語研究院, 2003, 서울말 낭독체 발화 말뭉치1/3 (音声資料)
- Kwon Jae-Il et al. (권재일, 김윤한, 문양수, 남승호, 전종호), 1997, 통사 구조와 운율 구조의 상관성 연구—중의성 해소 양상을 중심으로—, 언어학 제20호, 한국언어학회, pp. 59-112
- Kim Seon-Cheol. (김선철), 1994, 국어 악센트 연구의 방향, 언어학 제16호, 언어학회, pp. 3-21
- Min Gwang-Jung & Choe Yeong-Suk (민광준, 최영숙), 1994, 한. 일 양 언어의 초점에 관한 음향음성학적 대조 연구—초점의 실현에 관여하는 소리의 높이, 세기, 길이의 역할—, 日本學報 第32輯, 韓國日本學會, pp. 61-88
- Min Gwang-Jung (민광준), 1994, 한. 일 양 언어의 통사구조와 운율적 특징에 관한 음향음성학적 대조연구

- 통사적으로 애매한 문장의 의미구별에 관여하는 F0와 포즈의 역할-, 日語日文學研究 第24輯, 韓國日語日文學會, pp. 21-44
- Pak Ji-Hye (박지혜), 2002, 대화체와 낭독체의 운율에 관한 연구, 말소리 제43호, 대한음성 학회, pp. 11-23
- Seong Cheol-Jea (성철재), 1991, 표준 한국어 악센트의 실험음성학적 연구 -청취 테스트 및 음향분석-, 서울대학교 언어학과 석사논문
- Lee Gyeong-Hee & Jeong Myeong-Suk. (이경희, 정명숙), 2000, 한국어 파열음의 음향적 특성과 지각단서, 음성과학, 제7권 제2호, 한국음성과학회, pp. 139-155
- Lee Ho-Young (이호영), 1996, 적용 범위가 말토막인 음운 규칙들, 음성학과 언어학, 이현복 엮음, 서울대학교출판부, pp. 146-153
- Lee Ho-Young (이호영), 1997, 국어 운율론, 韓國研究叢書 第六十五輯, 財團法人 韓國研究院
- Lee Hyeon-Bok (이현복), 1973, 현대 한국어의 악센트, 서울대학교 문리대학보, 제19권 합병호 (통권 28호)
- Lee Hyeon-Eui (이현의), 2005, 일본인 학습자의 한국어 초점 청취와 발화 양상 연구, 한국어 학습자의 중간언어 연구 (한국어교육 연구 총서 1), pp. 221-263
- Jeong Myeong-Suk & Lee Gyeong-Hee (정명숙, 이경희), 2000, 학습자 모국어의 변이음 정보를 이용한 한국어 발음 교육의 효과 - 일본인 학습자를 대상으로, 한국어 교육 제11권 2호, 국제한국어교육학회, pp. 151-169
- Hasegawa Yukiko (하세가와 유키코), 2005, 일본어를 모어로 하는 학습자에 대한 음조 교육의 효과 -어두 파열음 및 파찰음을 중심으로-, 한국어 교육 제13권 3호, 국제한국어교육학회, pp. 379-404

<英語文献>

- Jun Sun-Ah, 1993, "The Phonetics and Phonology of Korean Prosody", Dissersion of Dh. P in the Ohio University
- Jun Sun-Ah, 1998, "Phonetic and Phonological Markers of Contrastive Focus in Korean", Proceedings of the 5th International Conference on Spoken Language Processing, Vol. 4, Sydney, Australia, pp. 1295-1298
- Jun Sun-Ah, 2000, 'K-ToBI (Korean ToBI) Labelling Conventions', Speech Science 7-1, pp. 143-170
- Jun Sun-Ah, 2003, 'The effect of phrase length and speech rate on prosodic phrasing', in the Proceedings of the ICPHS
- Kim Mi-dam, 2004 "Correlation between VOT and F0 in the Perception of Korean Stops and Affricates", ソウル대학교大学院言語学科文学硕士学位論文
- Kim Mi-Ryong, and Patrice Speeter Beddor, Julie Horrocks (2002) 'The contribution of consonantal and vocalic information to the perception of Korean initial stops', "Journal of Phonetics" 30, pp. 77-100
- Koo Hee San, 1986, "An Experimental Acoustic Study of the Phonetics of Intonation in Standard Korean", Dissersion of Dh. P in the University of Texas Austin
- Lee Ho-Young, 1990, "The Structure of Korean Prosody", Thesis of Ph.D in the University of London

註

- 1) 長渡 (2005) は学習者向けに具体的な韓国語の韻律的特徴を解説している。長谷川 (2005) においても, 高校韓国語教師向けに音調指導についてページを割いた。
- 2) 「韻律語」とは語彙の単位に助詞や語尾がつき, APを形成しうる最小の単位を言う。(Jun1993, pp. 71)
- 3) Jun S. A. (2005) は, IPより下位でAPより上位の韻律単位としてip (Intermediate Phrase) を追加したが, これはフォーカスに関わる単位であるため, ここでは省略する。
- 4) 5音節以上の場合には第一・第二音節のTHと次末・末音節のLHの間は漸次的な下降を示す。

- 5) Jun S.A. (1993) の A P, I P に相当する単位を Koo (1986) は minor phrase, intonation phrase と呼び、Lee H.Y. (1990) は 말토막 (rhythmic unit), 말마디 (intonation group) と呼び、Kim S.C. (1997) は中間句、抑揚句と呼んでいる。定義と記述内容に若干の違いはあるが、いずれも F0 ピッチ曲線として現れる音調パターンから導き出され、階層をなす韻律単位であり、実体としてはほぼ同じものを指していると言える。rhythmic unit という用語は Lee H.B. (1973, 1974) で提案されたもので、一音節以上からなる、ひとつの強勢音節を持つ発話の一区切りであるという。
- 6) 服部四郎 (1968), 関光準 (1989), 福井玲 (2000) など。
- 7) Lee H.B. (1973), 성철재 (1992), Kim S.C. (1994) など。
- 8) Jun S.A. (1993) で、一般にフォーカス要因と統語的要因がその他の要因——話速、句長、意味的要因に優先して適用されるが、時に統語的要因が句長および話速要因によって覆されうるとし、Jun S.A. (2002) では統語構造がフォーカスに優先されるとした。
- 9) 日本語においては、統語的曖昧文において隣り合った語が意味的に一体化している場合、「アクセントの弱化」(郡2003)が起こると説明される。
- 10) 日本語の場合「来る」で音をとると F0 曲線が明瞭に現れないため、「行く」で対応させた。
- 11) Kwon J.I. et al. (1997)。
- 12) Jun S.A. (2003) は、日本語は下線部と後続句の間に A P 境界が生じるという点で韓国語と異なるとしたが、Min G.J. (2004) は、日本語の場合は句本来のアクセントの拡大および抑制によるとし、韓国語の場合は 1 音節目から 2 音節目にかけての高さの上昇幅の拡大および高さの上昇の抑制としたが、いずれも F0 の上昇および抑制という共通の現象とみなした。
- 13) 郡 (1997) は、日本語において「フォーカスがある語のアクセントの高低変化が強調され(ただし義務的ではない)、同時にそれより後にある語群のアクセントの高低変化が抑えられる」として、これを「アクセントの弱化」(郡2003)と呼んだ。郡の「アクセントの弱化」は日本語の有核語による downstep と無核語による dephrasing を統合的に説明したものであるが、韓国語においても dephrasing を「F0 ピークの抑制」が極に達したものと、これに含めて説明することができよう。また、宇都木 (2004b) は韓国語において統語的曖昧文もフォーカスも後続する音韻的要素の「F0 ピークの抑制」で説明できるとしている。
- 14) 一般に、韓国語において wh 疑問文は文末イントネーションが下降調になり、yes-no 疑問文は文末イントネーションが上昇調になる傾向にあるが、wh 疑問文でも上昇調になることがあるため、文末イントネーションが曖昧さを解消する決定的な要因とはならない。
- 15) Jun S.A. (1993) はフォーカスのある語と後続要素はひとつの A P を成す (= 後続要素が dephrasing する) とし、Jun S.A. (2003) で、日本語は下線部と後続句の間に A P 境界が生じるという点で韓国語と異なるとしたが、宇都木 (2003) は dephrasing は起こる場合も起こらない場合もあるとし、これらを統合的に「F0 ピークの抑制」とした。また、Min G.J. (2004) も、日本語の場合は句本来のアクセントの拡大および抑制によるとし、韓国語の場合は 1 音節目から 2 音節目にかけての高さの上昇幅の拡大および高さの上昇の抑制としたが、いずれも F0 の上昇および抑制という共通の現象とみなした。
- 16) Kim M.D. (2004) は平音と激音の知覚キューとして F0 と VOT が相補的分布を示す一すなわち VOT が短くても F0 高ければ激音、VOT が長くても F0 が低ければ平音と知覚されるとした。
- 17) 日本語では語アクセントが基本的には文中でも維持されるが、韓国語では語の単独発話と文中発話とで音調的振る舞いが異なる。また、日本語のアクセント体系では第一音節が高ければ第二音節は低いのに対し、韓国語では、激音・濃音が語頭にきた場合、第一音節および第二音節が高い。
- 18) 窪蘭 (1998: p212) の「外来語アクセント規則」による。
- 19) 日本語では、「コンピュータ」「ソーセージ」のように 2 モーラ目が撥音や長音である場合、アクセント型としては起伏型 /LHHL L/ であっても音節内での音調上昇を嫌って、/HHHL L/ のように 1 モーラ目か

- ら高く実現される。そのため、例えば「キョンサンド (경상도)」のような場合、／HHHLL／のように第一音節が高く現れ、これが「경상도」の音調／HHL／として現れる可能性もある。
- 20) 文中の句末音調については、日本語の句末音調の自由度が大きく、語アクセントから導き出される音調が下降調であっても上昇調もしくは上昇下降調で実現される「尻上がりイントネーション」が若年層で多用される(井上史雄1992) ことなどから、韓国語の音調句末の上昇調もしくはイントネーション句末の上昇下降調は実現が容易であると考えられる。<図2> bの指導前の「갈비를」も、<図3>の「저는」「갈비를」の句末音調が上昇下降調となっている。
- 21) 宇都木 (2004c) は、1音節語は下降調、2音節語は下降調もしくは上昇下降調で実現されるとした。
- 22) 日本の大学・高校等で最も多く使用されている韓国語教科書15冊のうち6冊以上に現れた1,046語(連語、慣用句等除く)のうち162語が単音節語であり、そこから形式名詞、接尾辞を除くと106語となる。(長谷川・李近刊)
- 23) Jun S. A. (2003) では、朗読音声の分析の中で、単音節の修飾語が、後続語としばしば共起し、連続することによって意味がわかりにくくなったりせず、或いは単音節の修飾語が新情報を、後続語が旧情報を表しているような場合にのみ後続要素と共にひとつのAP(音調句)を成すようだと説明している。
- 24) 全体では20代の男女各20名ずつ、30代の男性10名、40代女性10名にはそれぞれ19種約3万字を、50～60代の男女各20名ずつにはそれぞれ11種約1万5千字のスク립トを朗読させた音声コーパス。
- 25) スクリプトの題名は「토끼와 자라 (うさぎと亀)」「선녀와 나무꾼 (仙女と木こり)」「햇님과 달님 (お日様とお月様)」「그리운 시냇가 (懐かしい小川)」「광화문 지하도 아주머니 (光化門地下道のおばさん)」「막 지은 밥 (炊きたてのご飯)」。
- 26) コーパスに添付されたスク립トには「이날」「이 날」のように分かち書きの異なるものが見られたが、ここでは分かち書きされたもののみを観察した。単音節語の韻律的振る舞いについて考察する場合、このような分かち書きの問題も考慮に入れる必要がある。
- 27) 2004年12月～2005年1月にかけて、韓国ソウル滞在歴もしくは韓国ソウルでの学習歴9ヶ月以上の日本語を母語とする学習者32人から録取した発話を観察した。
- 28) 有声音間での閉鎖音の有声音化の適用範囲は音調句 (AP, 말토막) である。(Jun1993, 이호영1996)
- 29) 学習者発話において「주세요 [ʃusejo]」の/u/が無声音に挟まれ無声音化しているという点も問題である。
- 30) ただし、単音節語が激音・濃音・/s/・/h/で始まる場合は、図6 a, bの真ん中と同様のパターンとなるため問題音調は出現しにくいものと予想される。